

Assises de la

35^{es} Traduction
à Arles LITTÉRAIRE

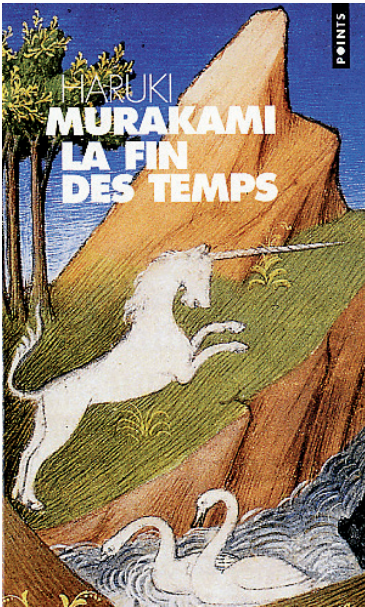
09-10-11 **NOV**
2018

Traduire le **TEMPS**

© Gilbert Garcin / Camera Obscura

Samedi 10 novembre • 10h30 > 12h30

Espace Van Gogh



Atelier japonais > français

animé par **Corinne Atlan**

La Fin des temps de **Haruki Murakami**

Edition du Seuil, 1992

「ここがいい」と私は言った。

スピーカーからはパット・ブーンの『アイル・ビー・ホーム』が流れていた。時間が間違った方向に流れているような気がしたが、もうそれもどうでもいいことだった。時間なんて勝手に好きな方向に流れていけばいいのだ。彼女は庭に面した窓のレースのカーテンを閉め、部屋の電気を消した。そして月の光の中で服を脱いだ。彼女はネックレスをとり、ブレスレットの形をした腕時計をとり、ヴェルヴェットのワンピースを脱いだ。私も腕時計を外してソファアの背もたれの向うに放り投げた。それから上着を脱ぎ、ネクタイをゆるめ、グラスの底に残ったウイスキーを飲み干した。

彼女がパンティー・ストッキングをくるくると丸めるように脱いでいるところで曲はレイ・チャールズの『ジョージア・オン・マイ・マインド』にかわった。私は目を閉じて両脚をテーブルの上に載せ、オン・ザ・ロックのグラスの中で氷をまわすみたいだ。頭の中で時間をまわしてみた。何もかもがずっと昔に一度起ったことみたいだった。脱ぐ服とバックグラウンド・ミュージックとせりふ科白が少しずつ変化しているだけだ。でもそんな違いなんてたいした意味はない。ぐるぐるとまわっていつも同じところにとどりつくのだ。それはまるでメリー・ゴー・ラウンドの馬に乗ってデッド・ヒートをやっているようなものなのだ。誰も抜かないし、誰にも抜かれないし、同じ

ところにしかたどりつかない。

「何もかも昔に起ったことみたいだ」と私は目を閉じたまま言った。

「もちろんよ」と彼女は言った。そして私の手からグラスをとり、シャツのボタンをいんげんの筋をとるときのようにひとつずつゆっくりと外していった。

「どうしてわかる？」

「知ってるからよ」と彼女は言った。そして私の裸の胸に唇をつけた。彼女の長い髪が私の腹の上にかかっていた。「みんな昔に一度起ったことなのよ。ただぐるぐるとまわっているだけ。そうでしょ？」

私は目を閉じたまま彼女の唇と髪の毛の感触に体をまかせた。私はすすきのことを考え、爪切りのことを考え、洗濯屋せんたくやの店先の縁台にいたかたつむりのことを考えた。世界は数多くの示唆しざに充ちているのだ。

私は目を開けて彼女をそっと抱き寄せ、ブラジャーのホックを外すために手を背中にまわした。ホックはなかった。

「前よ」と彼女は言った。

世界はたしかに進化しているのだ。